【3】高等部でねらうコミュニケーションの力

我々は、社会参加を目前に控えた高等部の生徒たちに、次のようなコミュニケーションの力を高めることをねらう。このような力を高めることにより、生活経験の拡大を背景として、社会や取り巻く環境に積極的に関わろうとする意欲を高め、主体的に社会で生きようとする社会人の育成が図れると考えた。

(1) 自己意識の形成　自分を知る力

高等部の生徒の発達年令は3歳4か月～11歳6か月と幅広い。「高校生だからがんばろう」「がんばったら～になるからがんばろう」というような『積極的な自制心の形成』をめざす段階の生徒から、「こどもじゃないから～さんみたいな大人になりたい。」「～もがんばっている～しなければ～だからがんばろう。」というような『自己客観視の芽生えと確立』をめざす段階の生徒までいる。

生徒たちは、大人になりつつある自分の「こころ」と「からだ」を意識し始めている。社会へ送り出すことを意識した教育活動を進める高等部では、生徒一人ひとりの発達段階に違いはみられるが、大人として扱うことにより、自分のできることやできないことに気づき理想の自分像をイメージして努力する、換言すれば「自分を見つめ直し、さらなる自分づくりができるような力」を養いたいと考えた。

(2) 受容する力

生徒が聞き手となる場合は、まずやりとりする相手を意識して、相手が何を言おうとしているのか聞こうとする態度や意欲を持たなければならない。また、指示や内容を正しく聞きとったり、相手の言いたいことを理解する力も必要である。このような聞く力・理解する力を高めていくことで、生徒は好ましい聞き手となり、円滑で豊かなコミュニケーションが可能になると考えた。

(3) 伝達する力

伝達の手段としては、音声言語によるものが伝わりやすく一般的であるが、身ぶりや表情や視線による感情の表出も大切にしたい。発語がある場合は音声言語のさらなる充実をねらうが、生徒の実態に応じて身ぶりやサインによる表現の定着を図ったり、カードやメモによる伝達を取り入れた方が実際的な場合もある。どのような場面でも必ず相手を意識させ、「相手にわかるような表現方法」を要求し、人にわかるように伝える方法を身につけさせたい。また、報告・返事・あいさつというようなある程度パターン化された表現を場に応じて使いこなせる力も養っていきたい。

なお、人間関係を良好にするためにも、ていねいなことば遣いや礼儀正しい対応の仕方を身につけさせておくことも必要であり、大切にしていきたい。

(4) 基盤となる力・知識・技能

社会参加していくために必要な「生活する力」の一要素として「コミュニケーションの力・社会や人と関わる力」を捉え、「生活する力」を高める指導と関連させながら、「コミュニケーションの力・社会や人と関わる力」の基盤となる知識や技能の習得・思考力の向上などをねらいたい。

その場合、あれもこれもと多くを望まず、一人ひとりの生活に根ざした基本的な知識や情報を適切

に提供し、具体的な実践方法や技能を確実に身につけさせたい。「生活する力」の高まりとの相乗効果で、コミュニケーションの基盤となるさまざまな力も培われると考えた。

あわせて、話しことばや書きことばの充実は大切であり「読む」「聞く」「書く」「話す」という基本的な力の向上をねらった指導も継続したい。

(5) 持っている力を発揮できる実践力

話す・聞く・理解する・考えるなどのコミュニケーションの基本的な力をある程度持っていても、設定された場面でないと自分の力を発揮できないことが多い。特に、初対面の相手や慣れない環境の場では、緊張のあまり何も言えなかったり、そういう場面では他からの働きかけを待つことに決めてしまい主体性に欠けるという傾向が強い。あらゆる場面での成功・失敗の経験を積み重ね、どんな場面でも、試行錯誤しながら自分で解決したり対処したりする実践力を身につけさせたい。

(6) 主体的に関わろうとする意欲

友だちや家族と語り合いたい、伝えたいという意欲を持たねば主体的なコミュニケーションは成立しない。人や社会と関わることの楽しさや喜びを味わわせたり、関わりを持たねば問題解決ができないという必要感を持たせて、自らが進んで関わりを持とうとする意欲を育てたい。

しかし、心理的な側面でみると、人前で話すことが気恥ずかしかったり、異性を意識して言動が萎縮してしまいがちな年齢にさしかかっており、必ずしも思ったことや感じたことを臆せずどんどん話せるようになることが望ましいというわけではない。このような思春期の特性を考慮しつつ、必要な時には自分の要求や主張を進んで意思表示しようとする意欲を育てていきたい。

我々は、この6つの力の高まりをねらって実践を展開していく。あらゆる場面で6つの力を意識して指導にあたることは大切であるが、教科や領域の特性を考慮して、この場面では特にこの力の養成を重視しようとか、この力を育てるにはこの場面が適しているという具合に、実践場面に応じてねらう力を焦点化した。

次の表は、各実践場面でのねらう力の比重を表したものである。

	自分を知る力	受容する力	伝達する力	基盤となる力	実 践 力	意　欲
生活一般	◎	○	○	△	◎	◎
課題学習	◎	○	◎	◎	○	△
職 業 科	○	◎	◎	△	◎	○

(◎重点としてねらう　○できるだけねらう　△できれば、もしくは付随してねらう)

これはあくまでも指導者の構えとしてのことであり、取り上げる題材や生徒の実態に応じて、流動的である。

この6つの力についての生徒の実態を把握したり、指導内容を明確にするために、180ページの課題一覧表のチェック項目として、6つの力を細分化した「コミュニケーションに関するつけたい力」を挙げている。